

外国人技能実習生の「合目的的行為」——中国人技能実習生を事例として
'Purposive Action' of Technical Intern Trainees : :A Case of Chinese Technical Intern Trainees

李 萌 (島根県立大学)

Li Meng (The University of Shimane)

キーワード：技能実習生、合目的的行為、生存戦略、従属的構造、主体的な行動空間

1. 本報告の目的

本報告の目的は、外国人技能実習制度の構造的な制約のなかで技能実習生がいかにより自らの主体性を発揮し生存戦略を営むかを検証することにある。

外国人技能実習制度は1993年の創設以来、技能実習生に対する搾取と人権侵害が指摘され、国内外の学界や市民社会から広汎な批判を受けてきた。先行研究のなかには、技能実習制度の制度設計自体に内在する目的と実態の乖離または技能実習生の苦境に着目し、「奴隷労働」や「人身取引」などの表現を用いて技能実習生の人権問題の深刻さと彼女/彼らの従属的な地位を告発するものも多く見られる(指宿、2020; 巢内、2019; 鳥井、2020など)。また、技能実習生の人権侵害を引き起こす要因を技能実習制度が抱えている「構造的」な問題や搾取的な「仕組み/システム」に帰結させるのが一般的である(指宿、2020; 旗手、2019; 鳥井、2020など)。他方、技能実習生の社会的行為者としての行動原理および技能実習生の主体性の発揮に関する経験についての学術的な説明と分析は今なお手薄である。

本報告は、技能実習制度の構造的な問題に起因する権力構造への注目に加えて、技能実習生はその権力構造のなかで位置づけられた自分の従属的な地位をいかに受け止めているかを把握し、そのうえで彼女/彼らはいかなる主体的な選択を行い、自らの生存と出稼ぎ目的を勝ち取るかを考察する。この考察を通して、本報告は技能実習生の主体的な選択を「合目的的行為」として提示する。ただし、本報告は、技能実習生の限定された主体性を評価するものではない。むしろ技能実習生の屈折した合目的的行為に着目し、技能実習制度の制度設計から派生した権力構造と技能実習生の実践との関係性を捉えることによって、技能実習制度の権力構造の具体的な暴力性を立体的に把握する。

2. 研究対象と研究方法

研究対象については、本報告は、調査対象者との意思疎通の問題を最大限に回避し、技能実習生の「生の声」をより適切に把握するために、報告者と同じく中国出身の23名の中国人技能実習生に対してネイティブな言語(中国語)を用いて半構造化インタビュー調査を実施した。また、本報告は、中国人技能実習生の人間関係のネットワークに基づいてスノーボールサンプリング法を用いて調査対象者のサンプル数を増やすことに努めた。この手法は、閉鎖的な職場環境で不可視化された労働者である技能実習生に接触することを可能にすると同時に、技能実習制度において従属的立場を強いられる技能実習生の不信感を最大限に払拭し、技能実習生の「声なき声」を最大限に捉えることができる。

本報告は23名の調査対象者の来日経緯、技能実習の経験、在日生活の状況などを把握したうえで、調査対象者が職場において不当な扱いを受けたときに自ら行ったリアクション(権利主張に関わる諸実践)を類型化した。この類型分析を通して、技能実習制度の構造的な制約は技能実習生の実践にいかなる影響を与えているか、技能実習生の社会的行為者として有する主体的な行動空間の幅を提示することが可能となる。さらに、制度による構造的な制約のもとで、技能実習生は個人のモチベーションに合わせて、いかに限定された

主体性を自ら発揮し、自己保存と権利損失の最小化及び出稼ぎの最適な実現を営むこと（技能実習生の「合目的的行為」）ができるのかを検証することによって、技能実習生の主体的な行動空間を奪いつつある技能実習制度の権力構造の暴力性を可視化させる。

3. 調査結果と分析

本報告は、先行研究に提示された技能実習制度の構造的問題に基づいて、技能実習制度の越境的な仕組みから派生した権力構造、すなわち技能実習制度の「従属的構造」を提出した。そのうえで、技能実習制度の「従属的構造」と技能実習生の実践との関係性を捉えることを試みた。具体的には、職場において不当な扱いを受けた技能実習生のリアクションに目を向け、技能実習生の認識と行為の連関を設定し、職場において不当な扱いを受けた技能実習生の相応な実践を、無認識-無作為、有認識-無作為、有認識-有作為、無認識-有作為という4つのパターンに分けた。ただし、この理念型に対する検証は、無認識-無作為、有認識-無作為、有認識-有作為という三つのパターンだけが実証的に観察された。

この考察によって、職場において不当な扱いに直面しつつも、技能実習生には、個人の限定された主体性を発揮し自らの生存と出稼ぎ目的を勝ち取るという「合目的的行為」を行う空間が存在することを明らかにした。つまり、技能実習制度の従属的構造のなかで、技能実習生は完全に受動的に構造からの制約を受け止めるわけではない。むしろ技能実習生は、絶えず賃金収益・権利回復、職場環境、権利主張の実現可能性との三者間の緊張関係を内面化し、積極的に権利主張に関わる取捨選択をとることを通して自己保存と出稼ぎの実現の可能性をできる限り獲得しようとする。

そして、技能実習生の権利主張に関わる取捨選択を分析することによって、①技能実習生の出稼ぎに対する期待の変化、すなわち経済的利益の最大化から最適化への「シフト」と、②権利主張の実現可能性が脆弱である場合の妥協による主張行為の「軟化」、という技能実習生の合目的的行為の2点の特徴を観察してきた。このように、技能実習制度の構造的な制約によって現れてきた技能実習生の合目的的行為の流動性こそが、技能実習生の生存戦略そのものである。しかも、この「合目的的行為」は技能実習制度の従属的構造を一層強化し、それによって技能実習生の主体的な行動空間が更に奪われる、というマクロな制度の構造とミクロな技能実習生の合目的的行為との相互作用が考えられる。

4. まとめ

本報告は、既存研究に十分に議論されていない技能実習生の行動原理と主体性の発揮に着目し、技能実習制度の従属的構造のなかで行われた技能実習生の権利主張に関わる諸実践の特徴と技能実習生の主体的な行動空間の幅を捉えた。また、技能実習制度の従属的構造のなかで、技能実習生は限定された主体性を発揮し「合目的的行為」を行い、独自の生存戦略を営んでいることを観察してきた。以上の作業によって、技能実習生が実感してきた制度からの制約の実態とその影響が明らかになったと同時に、技能実習生の主体的な行動空間が絶えず技能実習制度の権力構造に収奪されることが浮き上がってきた。

5. 主な参考文献

- 指宿昭一（2020）『使い捨て外国人-人権なき移民国家、日本-』朝陽会
- 巢内尚子（2019）『奴隷労働——ベトナム技能実習生の実態』花伝社
- 鳥井一平（2020）『国家と移民 外国人労働者と日本の未来』集英社
- 旗手明（2019）「外国人労働者の現状と技能実習制度」『日本における外国人・民族的マイノリティ人権白書 2019年』外国人労働者権利法連絡会, 10-12頁